

# 探訪 北の風景 18

## サロベツ原野 宗谷管内・豊富町

青木和弘

あなたと私の まわりで笑う  
(二、三番省略)

1971年7月にNHK札幌局が「新しい北海道の歌」としてテレビやラジオで毎週放送した。東京出身で1945年に士別市に開拓で入った、詩人で児童文学者の友田多喜雄の詩に、自治労組合員だった八子政信が曲を付けた。八子氏には、その後、何度かお目にかかった記憶があるが、ゆっくりお話を伺う機会はなかった。

全道庁青年婦人部が70年代に発行した歌集「うたう仲間」に作品が収録され、自治労サマーキャンプなどでもよく歌われた。

野鳥のかしましいほどのさえずりが天空を覆うように降ってくる。エゾカンゾウの黄色い花が終わりかけていた。道北の短い夏に陰りを感じ、湿原を巡る雨上がりの木道を歩みながら思い浮かんだのは、「サロベツ原野」という歌である。

1970年代によく口ずさんだ。

海の匂いを 風は運ぶよ

朝日に向かって 口笛吹くと

サロベツ原野の 黄色い花が

あなたと私の まわりで笑う

おおらららららら おおららら

私が、サロベツ原野を記憶に焼き付けたのはこの歌だった。その後、81年、突如、サロベツ原野の南に位置する幌延町に核廃棄物の処分場計画が浮上し、一気に反対運動が巻き起こり、「サロベツの自然を核のゴミで汚すな」という大きな声となった。

歌集の解説には、「サロベツ原野は、日本最北の湿原で、現在、開発が国立公園指定かで激しく争っている地域です」とある。

サロベツ原野は北海道の北部、宗谷管内豊富町と幌延町の海岸線沿いに広がる湿地で、湿原の規模は東西7キロ、南北28キロ、面積230平方キロメートルにも及ぶ。日本有数の大湿原である。



サロベツ原野の牧草地から見る利尻山

日差しが強まる初夏には、100種類以上の花が湿原全体を彩り、独特の植生が豊に見られることから、一部はサロベツ原生花園と呼ばれる。湿原の中をゆったり流れるサロベツ川は、天塩川と合流して天塩町で日本海に注いでいる。

確かに当時、利尻礼文国定公園にサロベツ原野を加えて国立公園にする動きがあった。1974年9月20日、「利尻礼文サロベツ国立公園」がスタートしている。観光事業への期待感も大きかった。2005年11月8日にはラムサール条約登録湿地になった。

札幌方面からサロベツ原野を目指す場合、日本海沿岸を国道232号で北上し、天塩町から天塩川を渡って海側の道道106号を行くと、幌延の





サロベツ湿原センターの木道。途中に展望デッキも設置されている



郷土の自慢 豊富町の豊富温泉は大変珍しい湯だ。濃い食塩泉なのだ、何と石油が混じっている。これが皮膚病に効くというので、全国から湯治に訪れる人々が絶えない。ひどいアトピー性皮膚炎が完治したという報告もある。町の日帰り温泉施設「ふれあいセンター」（豊富町豊富温泉、電話0162・82・1777）には、湯治専門の浴室も設けられ、一般客に気兼ねなく入浴できる。一般浴室の湯は油分を濾（こ）しているが、よく温まるいい湯だ。ぜひ、一度、お試しあれ。石油臭はなかなか取れないが、2、3日で気にならなくなる。

オトノレイ風力発電所が出迎える。平らな道を北上し、道々972号へ右折してパンケ沼方面に進むと幌延ビクターセンターがある。一方、北上を続け、豊富町市街へ向かう道道444号沿いにサロベツ湿原センターがあり、サロベツ原生花園を散策できる木道が整備されている。

ここは、渡り鳥の重要ルートで、風力発電所に鳥が衝突する事故増加が懸念されている。全世界で増え続けている風力発電の適地といわれる道北にあって、新たな課題に遭遇しているのだという。乾燥化が進むサロベツ湿原では自然再生事業が実施されているが、捕獲量が激減した「天塩のシジミ」ではないが、現代人の活動と自然の営みを、うまく調和させることはたやすいことではないようだ。